東京ジャーミイ金曜日のホタバ

私たちの預言者の正義

2011 年 5 月 13 日

親愛なるムスリムの皆さま。社会の絆とは愛です。そして、その中心にあるのが正義です。不公平や不平等によって権利が侵害されると、人はだれしも不快感や嫌悪感を覚え、社会に無秩序な状態が引き起こされます。だが社会に正義が実現されれば、人間同士の絆は強くなり、平等な世界をそこに築くことができます。正義とは、クルアーンにおける最も基本的な概念のひとつです。例えば、クルアーン第１６章７６節は、正義の精神を欠いた人物と、そうでない人物とを比較したものです。「アッラーはふたりの比ゆをあげられた。一人は聾唖者で、何の力もなく、その主人にとっては重荷であり、どこに遣わしても、善いことをもたらさない。こんな者と正義を勧め、正しい道を踏む者と同じであろうか」

預言者ムハンマドは、常に公平と平等の精神にもとずいて行動しました。人を差別することは決してありませんでした。イスラームの諸文献、ことに預言者ムハンマドのハディースの中には、正義にまつわる預言者の多くの言葉があります。例えば、「個別の犯罪に関する罰は、親戚や部族ではなく本人にのみ課すべきこと」、「法の前ですべての人々は、その地位や部族に関係なく平等であること」、「容疑者には弁護される権利があること」などといった正義について頻繁に言及されている。それらはすべて正義について預言者が実践してきた考え方である。

預言者ムハンマドは、そうした人々の権利については、常によく配慮し、慎重な行動を心がけていました。彼は、どのような人であっても、その財産や生命等の権利を侵害することはありませんでした。万が一、彼が不本意に誰かを傷つけてしまったとしたら、彼はその人に率直に謝ることを厭わなかった。誰かが、彼に権利を侵害されたといってくれば、直ちに彼はそのことに対処した。こうした預言者の振る舞いは、以下の話にもあるように、私たちの心に強く訴えてきます。

バドルの戦いを前にして、預言者がイスラーム軍の隊列を整えていたとき、サア.ード・ビン・ガジィッヤという教友（サハバ）が隊列を乱し前に進み出てきました。それを見た預言者は、隊列を整えるために、サアードのお腹のところに矢をあて、後ろに下がらせました。そのときサアードは、「アッラーの預言者よ、あなたは私に痛みを与えました。アッラーは、あなたに真実を与え、あなたをこの世に預言者として遣わしたはずなのに。さあ、私に仕返しさせてください」と言った。すると預言者ムハンマドは、自らお腹を出し、仕返しするようにと言ったのです。サアードは預言者を抱擁し、キスをしながらこう言いました。「アッラーの預言者よ、見てください、私は（もうすぐ始まる戦争で）自らの命を落とすかもしれません。私はただこう願ったのです。“死ぬ前に、あなたの肌と私の肌が触れ合えますように”と。そこで預言者ムハンマドは、彼のために特別な祈りを捧げたのです。

この話の中で、私たちが注目すべき点は、預言者ムハンマドが、当然のこととして相手に、仕返しする権利を与えたことの重要性です。彼はいつ、どこにあっても、平等な権利の行使を求めたのです。それが、たとえ戦いのための軍隊を整えているようなときであっても。

預言者ムハンマドは、不平等であることを強く非難しています。不平等とはつまり、あらゆる意味で、正義の反意語であるといえます。預言者はこのことを、繰り返し諭されています。その中でも最もよく知られている例を次に述べて見ましょう。「ムスリムは皆兄弟です。したがってムスリムは誰も迫害してはいけません」。つまり預言者は、ムスリム同士での争いや迫害を禁じています。と同時に、他の宗教に属する人々への迫害も禁じています。

これで預言者ムハンマドのハディースにもとずいた本日のホトゥバを終わりたいと思います。

この演説の主題は、「人との交流において正義をもって接することができる人には、サダカの恩恵がある」ということです。